



共古日録
二十九

共古日録

5.3.10

共古日録

共古日録

共古日録

共古日録



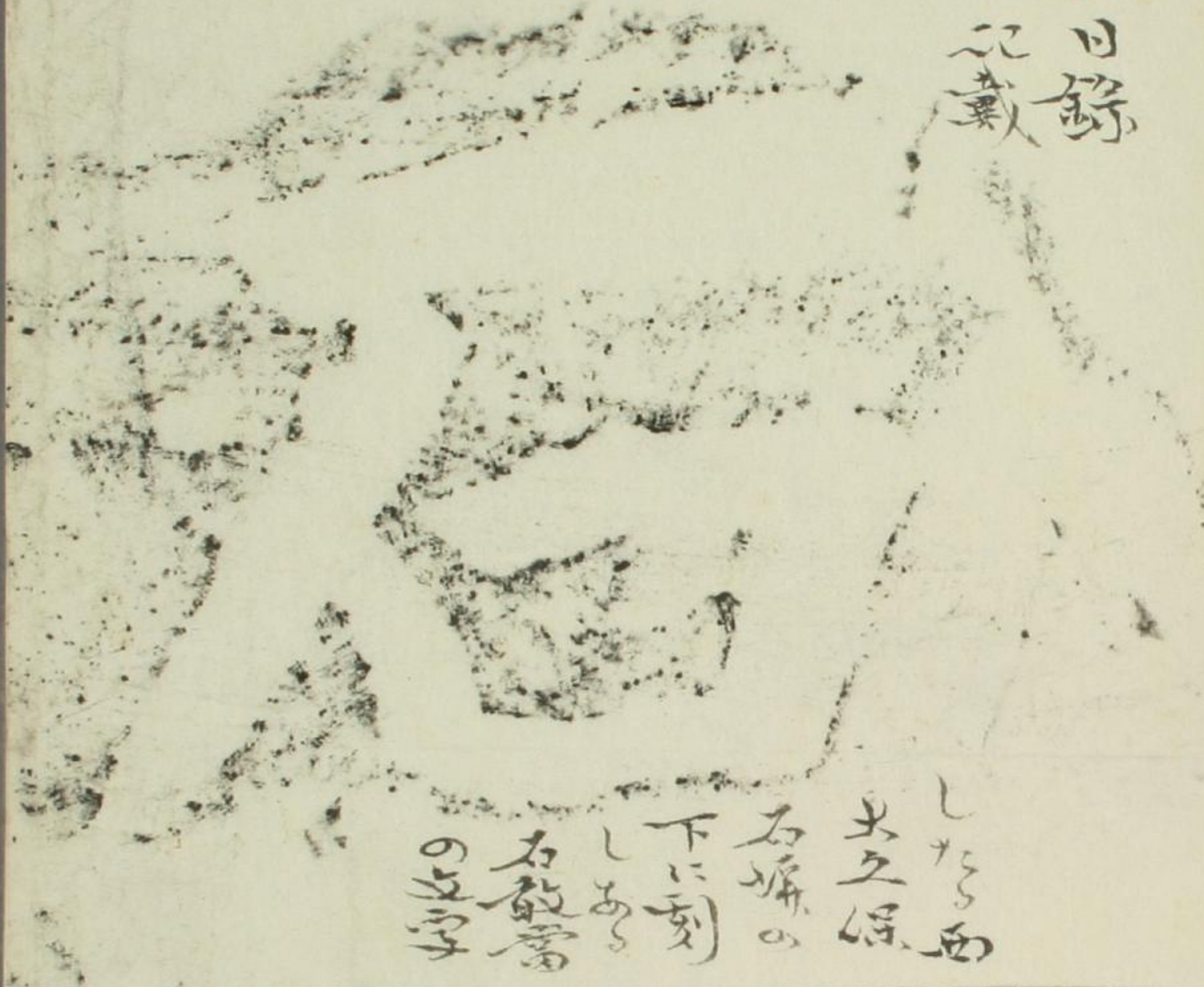
特別
15
1413
31



塞の神のさ
とて妻より幸
に轉じしと
に載

飯の傳一其年申行奉の道祖神のありて塞神のさには
に妻幸に轉し木石等を用ひ生殖器の形を造り神と
して之を崇拜し或は之に良薬を祈り或は安産を祈り又
婦の神として之を崇拜するの天細女命を祀したる事
多くあるから来たともあると記されてある事多し本邦
には生殖器崇拜上古より行はれしものありて其の
さのさの味をなせしとて起し之を指し奉るものなるが飯の
の飯妻幸に轉せしもの考證或は然るかを思は
記し奉る事あり又塞のさと天細女命を交け神のさにして
道祖の右邊は徳川以前の日のさや鏡りしものなること

西大久保の
石敢當
に載



したる西
大久保
石敢當
下に刻
しあり
石敢當
の文字

石敢當

天中祭の器人形 大坂 七人形 鳥
あんぎー 人形 七人形 堤岸 七人形
七人形 鳥

等の人形物あり

このゆゑに 玩賞の中心を以てするものあり
ものゆゑに その日海をあらわすに

竹馬 也車 卯杖 卯槍 越中 越中 羽子 大坂

羽子 大坂 卯杖 卯槍 越中 越中 羽子 大坂

越中 越中 羽子 大坂 卯杖 卯槍 越中 越中 羽子 大坂

卯杖 卯槍 越中 越中 羽子 大坂 卯杖 卯槍 越中 越中 羽子 大坂

卯杖 卯槍 越中 越中 羽子 大坂 卯杖 卯槍 越中 越中 羽子 大坂

卯杖 卯槍 越中 越中 羽子 大坂 卯杖 卯槍 越中 越中 羽子 大坂

粒 けしきき 概きき 米つきき みかんのきき 木挽きき

淡きき 面形 蝶々 変りきき 細きき つばきき

鉄砲 鉄こま びんごん 切り双丸 双六

手車 鉄こま びんごん 切り双丸 双六

かき多き 天正のたて 天正のたて 天正のたて

無木 千木箱 響 ぶかしのが 吹上形 張る気

張る気 響 ぶかしのが 吹上形 張る気

水出し 箱庭 箱庭 箱庭 箱庭

箱庭 箱庭 箱庭 箱庭

箱庭 箱庭 箱庭 箱庭

箱庭 箱庭 箱庭 箱庭

正字通鐵之貫者為鑄鐵とあれば今云サシ也
日本紀の字を假して訓せつけたるものも鐵のこぼし
アシと云なるもの故に然セアシラと訓事とせたるよし
貞永今日公事不足と云も料足の事と申の
私の水いづち所セアシと云西土に在水と云
鳩尾の鐵と料足と云い候はるるよしと云
晉書に急鑿鐵神術と云い無羽者而能走と云
皇塔雲遊の歌に初到東山嶺骨内腹下有鐵三百文
と云一文と云足と云い候はるるよしと云
此の事と云い候はるるよしと云
此の事と云い候はるるよしと云

倭訓栞の
載あり

倭訓栞のありのをもふせり
徒然草に多くのあり候はるるよしと云
料足用物をの稱と云い候はるるよし
鶴林玉露に硬鐵如硬水と云

考人のこと
に出されしこと

千年の如(保科三之)の傳
一知り殿のあ子良崇延命末為惣馬致辻賣小事吉例
の由世に申習しかて見性院殿より有泉且無味に申中
有且無衛後幸始姉と姉と云い候はるるよしと云
家来火堂と云在申り合ひ買取り申りせ為申祝儀小帳
に云き上り候はるるよしと云
右は慶長十九年以のこをたう辻賣り出さるるよしと云

台徳院殿大相國のあの方
會津中將源公事諱は正之

婦これと圓平有孔の錢と思ふ事案より非ずとす
夫が宣旨本なるか事案ありと云ふ事案あり
持經より鐵鑄の錢田舎よりサキリスの銅あり
このとせは宣旨本の原形なる鐵の輕き意て火鐵の鑄
と宣旨本は大小輕重一ならず輕き鐵片の如きあり輕
きと意て重火なるもの作らざりしものなる
何んを事案なるか事案ありと云ふ事案あり
名跡貝を幣とす起し田舎有孔の銅鑄幣の如き
しゆ鐵なる名跡幣一物とす現今の鐵に非ずと云ふ
夫は名跡田舎なる鐵より宣旨本に非ずと云ふ事案あり
孔の銅鑄幣の如き形を名跡幣とす起し田舎有

宣旨本の
鐵の輕き
意て重火
なるもの
作らざり
しものな
る

大正四年十月の事案は難儀なる島嶼の子守頭として云ふ
あり、理定は姪遺品より重寶あり、日本民権令と等しく見せ
ぬことありしとす

坊やはいまだ 難んぬしむ 坊やのおきり 何ぞに往た
坊やのおきりは 嫁に往た お嫁の仕度にはに貫つた 筆筒
長持 袂み箱 これ程仕立て 着かすは 庚のぢやちいをえ
こりや娘 もこし母さん ありや無理よ 東ヶ嶺れば風を
西ヶ嶺れば雨を する境に 船が合はるや 出て戻ら
出て戻ら 船が合はるや 出て戻ら 船が合はるや 出て戻ら
舟の目録なるもの 船の昔事にはあらずとす
おきり 船の目録なるもの 船の昔事にはあらずとす
おきり 船の目録なるもの 船の昔事にはあらずとす
おきり 船の目録なるもの 船の昔事にはあらずとす

物もつあしてはきり嫁の者があつては七つをせよと云ふは
さういふものありしに物言ひと云ふはさういふものありしに
リヤヤ性根をあらうと云ふはさういふものありしに
物言ひと云ふはさういふものありしに
かゆか古きをあらうと云ふはさういふものありしに
と海ゆ又善道のある理縁縁三軒の他は改まるに越後
と物言ひと云ふはさういふものありしに
天保三年十一月五日に改まるに
さういふ物言ひと云ふはさういふものありしに
此の物言ひと云ふはさういふものありしに
大の国固あるはさういふものありしに

いふ

いふと云ふ言ひ
節り新ふと云ふ言ひ
書せて文蔵の二三味縁の相の子都の端出たてり
の及りしと云ふ言ひ

梅子の序後

か
宿谷姫跡先生書り
宋教本南川書海後
書宋教謝幼梨文集後
明刊野家書後
法王寺説心証後
歌書
古京書
言和二年
文化十年
日年
文化四年
文化四年
文化五年
文化五年

轉注説

宋蔡東坡事始

宋蔡大守本

書送庵松樹

重彫宋本

萬葉用字

正利學

書和名

日考

五八六

三十一

五八五

五八九

四十一

五八八

四十四

五八七

四十二

五八三

四十二

五八三

五八元

五八十

書諸國封戸

影雕多度

右序

志

家

之

所

有

之

下

田谷

也

也之瑞

見の番所の構造と出張人数
番所は東屋の構造は向の付増して元向位にあり
元向の向の道は総尾葺き丸の葺きを敷き
東向の總の廊下をなれど西向の葺きは元向の
と異なる。廊下上手に背葺きは元向の
せし人の道敷きを馬と繋ぎたる。其の
五間下上手の人手を控へたるは元向の
に七間下下程に上手の二三人控へて番所の命令を
南へ向ふの正面に立ち停れむ通下らしと可貴し。廊下
外は平也より高く壁を築めたるは僅二三丈廊下には
馬蹄めの火網を巻くあり外には突捧袖がらみ
る取の二道具を海へたり。廊下下手は出張番所の定

番所の構造と出張人数
番所の構造は東屋の構造は向の付増して元向位にあり
元向の向の道は総尾葺き丸の葺きを敷き
東向の總の廊下をなれど西向の葺きは元向の
と異なる。廊下上手に背葺きは元向の
せし人の道敷きを馬と繋ぎたる。其の
五間下上手の人手を控へたるは元向の
に七間下下程に上手の二三人控へて番所の命令を
南へ向ふの正面に立ち停れむ通下らしと可貴し。廊下
外は平也より高く壁を築めたるは僅二三丈廊下には
馬蹄めの火網を巻くあり外には突捧袖がらみ
る取の二道具を海へたり。廊下下手は出張番所の定
番所の構造は東屋の構造は向の付増して元向位にあり
元向の向の道は総尾葺き丸の葺きを敷き
東向の總の廊下をなれど西向の葺きは元向の
と異なる。廊下上手に背葺きは元向の
せし人の道敷きを馬と繋ぎたる。其の
五間下上手の人手を控へたるは元向の
に七間下下程に上手の二三人控へて番所の命令を
南へ向ふの正面に立ち停れむ通下らしと可貴し。廊下
外は平也より高く壁を築めたるは僅二三丈廊下には
馬蹄めの火網を巻くあり外には突捧袖がらみ
る取の二道具を海へたり。廊下下手は出張番所の定

和泉村泉龍寺
の鐘銘及板碑

明和甲申七月(庚午) 鴨河至小川所
明和三年(乙未) 芝堂安布
日四年(戊午) 下谷所
日七年(辛卯) 小石川丸山
明和五年(癸巳) 神田日本橋北
安永四年(乙未) 葉地
日本橋南
江戸今部 出来道見の板碑
其鬼屋 日本橋通三月吉日
名前の

武蔵玉川也 和泉村泉龍寺の鐘板

南無阿彌陀佛 即 壽 詞 曰
本國 國東 道 武 蔵 州 多 摩 郡 泉 江 山 會 以 泉
龍 禪 寺 二 世 欄 堂 堯 大 和 尚 三 持 丹 安 秋 舉 大

禪定尼善娘奉鑄鐘

銘曰

乃至善男平為利也若也

張至石右平右平正勝

慶安元戊子歲八月三日

鑄至御石火子作若九州豐後國任之新武州

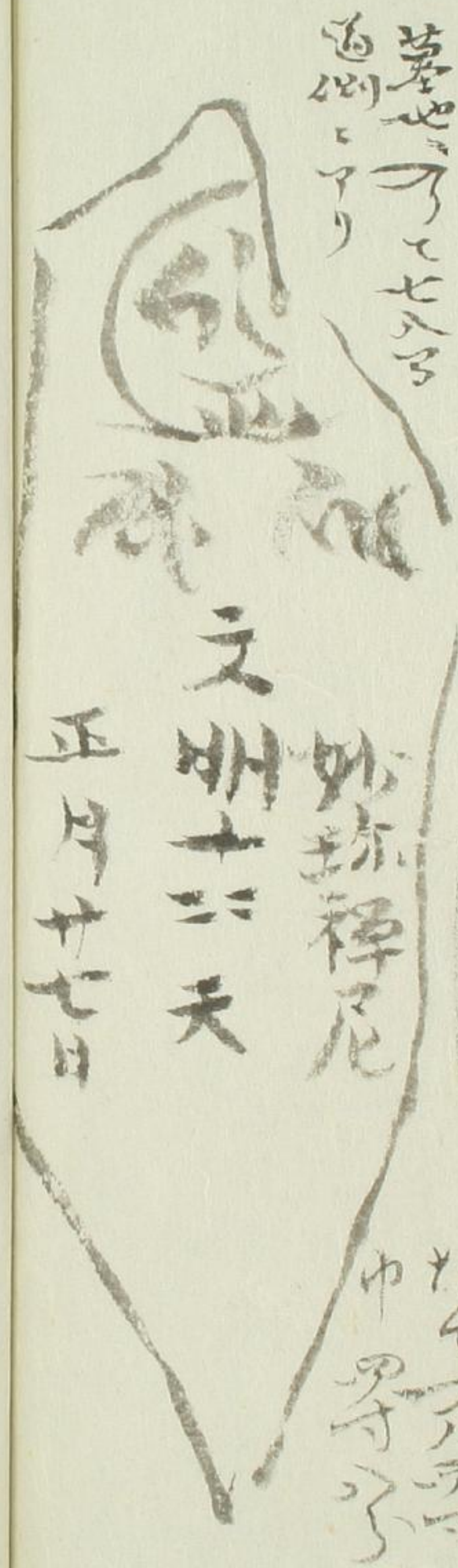
渡也石見守藤原康昌
善右衛門尉康輝

媽子

(共七云の銘とあり
今之也神あり)



縦一尺三寸中三寸



墓心アリ
石アリ

妙法禪尼

横一尺四寸
中四寸

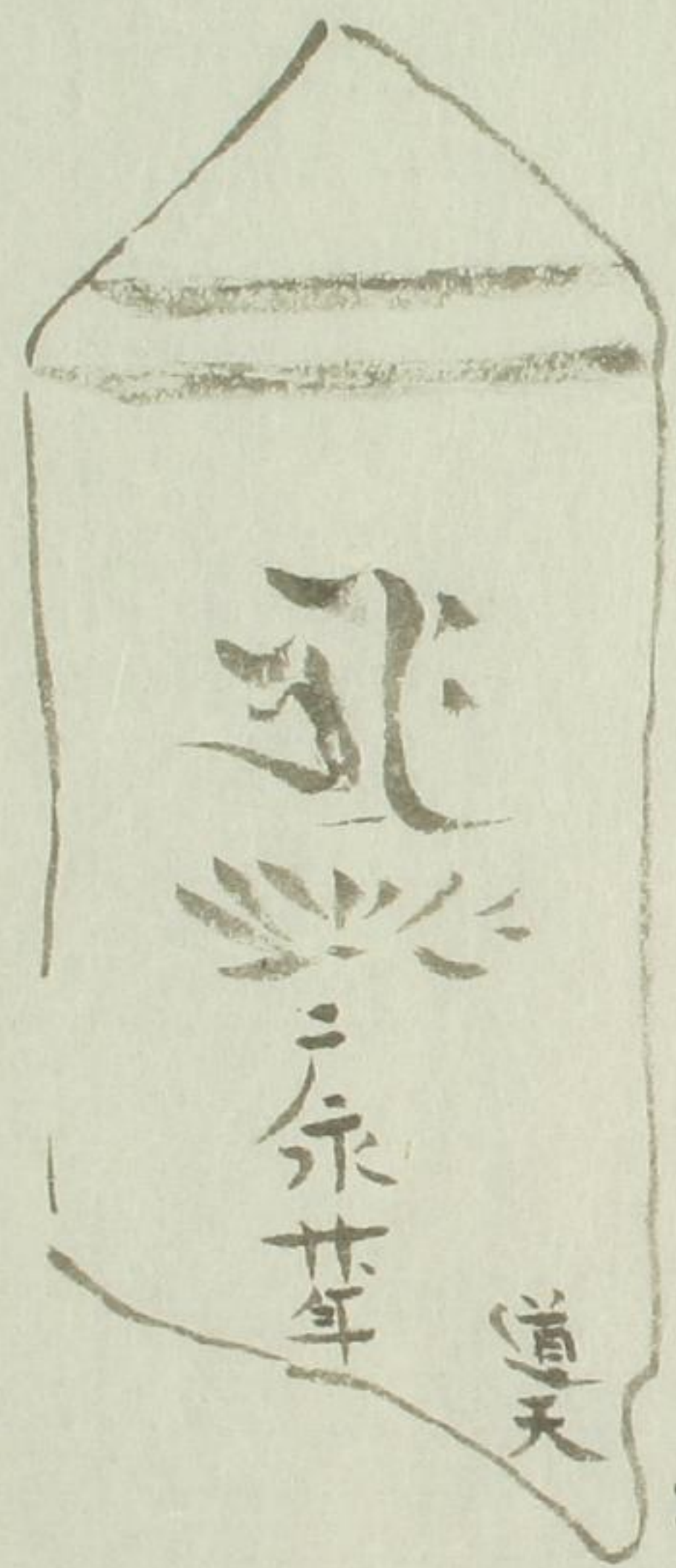


泉龍寺墓心の板碑

墓石の上にある

縦一尺三寸

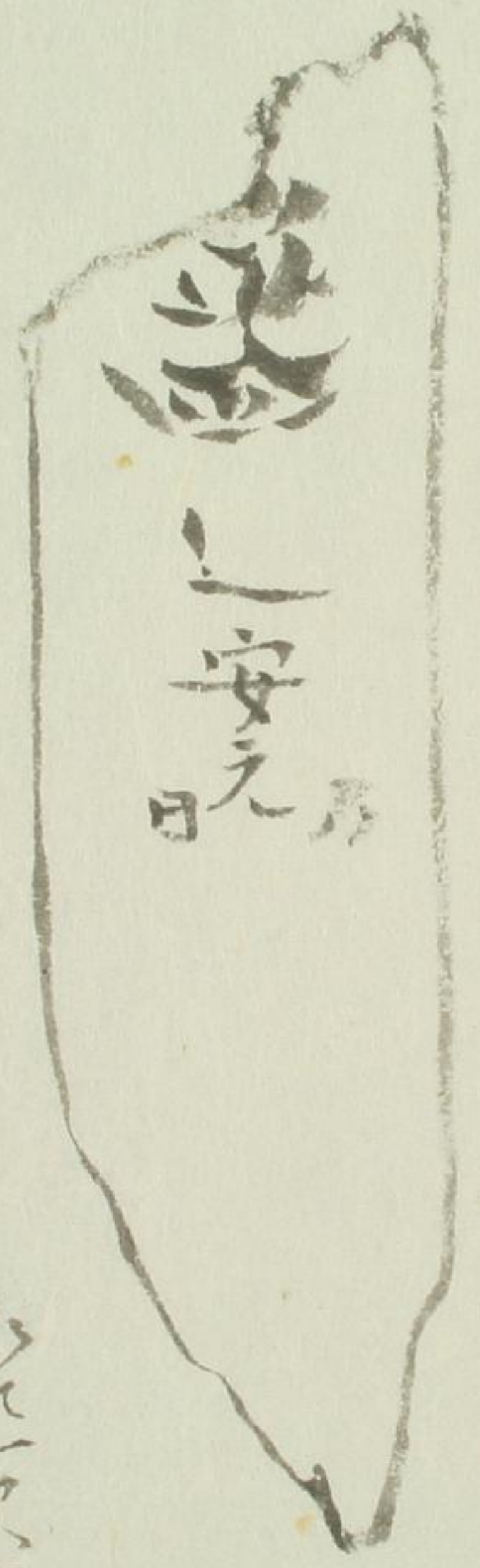
横一尺四寸



道天

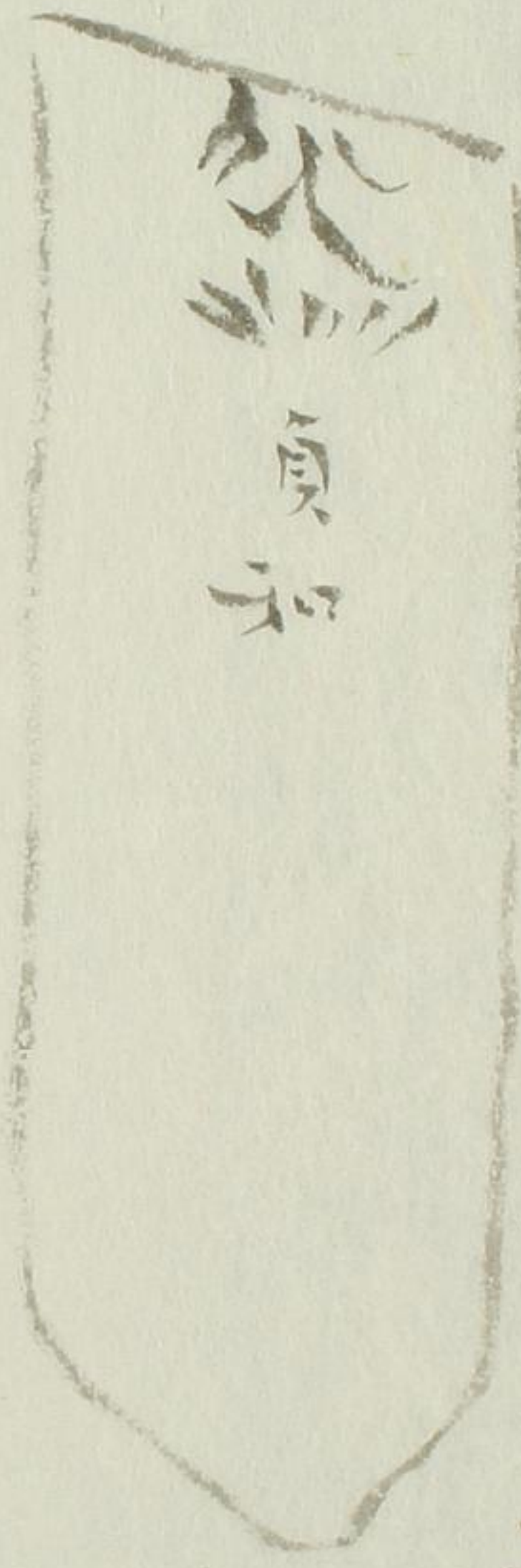
廿年

廿年

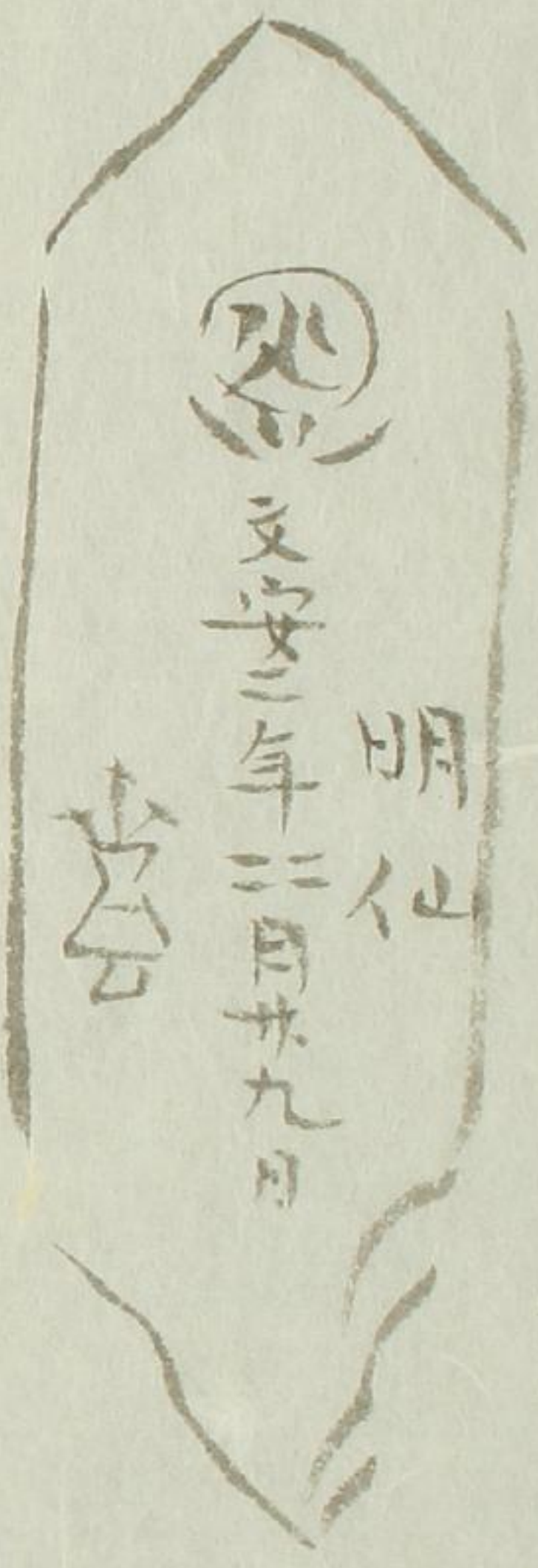


縦一尺三寸五分

経塚マリン石



縦一尺七寸 中五寸五分



縦二尺一寸五分

元禄四年の事
元禄初年

夢の西年の事... 長壽年... 元禄四年の事... 狂言本持歌撰

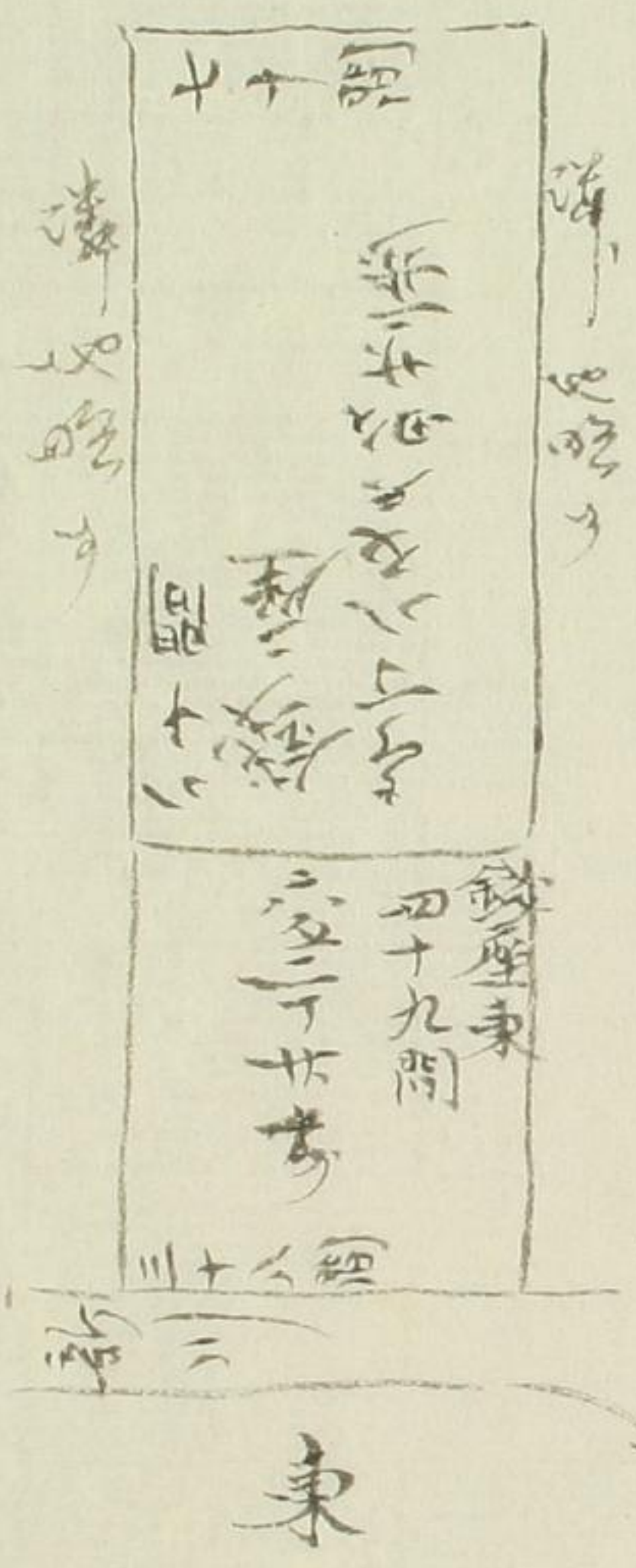
狂言本持歌撰

元禄四年の事
元禄初年

狂言本持歌撰... 七不思... 馬鹿... 番所... 馬鹿... 狂言本持歌撰

所無の住せし今より百七十七年也此荒物也の所と
 跡なりと此向の角に宮及び七と地せしと又今も
 市四十三方以て百七十七年也此味成の故本より家屋
 東よりありしと此地のちりむ十向地の所より千田跡と
 小社あり今も此幼年の地といふはまほこらありと
 此將軍跡の所か此地を焼く始なりと跡と此跡後
 鐵座よりありし地を焼く始なりと跡と此跡後
 千田跡と此跡を焼く始なりと跡と此跡後
 此中より鐵ありし地を焼く始なりと跡と此跡後
 此の地ありし地を焼く始なりと跡と此跡後
 此跡を焼く始なりと跡と此跡後

高の地ありし地を焼く始なりと跡と此跡後
 えん又藏改とて此地ありしと跡と此跡後



十方地の地を千田跡の地と改せし
 書款ありしと跡と此跡後
 今もこの地ありしと跡と此跡後
 此跡を焼く始なりと跡と此跡後
 此跡を焼く始なりと跡と此跡後
 此跡を焼く始なりと跡と此跡後

跡の跡ありし地を焼く始なりと跡と此跡後
 此跡を焼く始なりと跡と此跡後

リと強り仰し多をなすと

安南曆

安南曆のつらし始は文暦甲子のこのころ青蓮教を奉じて
二秋の夜平あり大越永祚七年欽授曆と題しありて
二日る大越景治三年歲次己巳欽授曆とあり
全二十八箇年也但基末の紀年二葉あり印本也
干盤徳通寶錢一枚あり銅貨製他安南錢あり
フカラストイハ其後リ筋々今其曆日、紀年あり
徳ノ年號己巳盛徳通寶錢安南、所銘花丁可知也
景徳元年癸巳國朝兼恩二年癸巳當此曆、景
治三年己巳國朝實文五年也
安南曆日記年略

弘治七年丙午 八九十十一十二十三十四十五十六十七十八十九
幹安弘治七年丙午國朝慶長十一年丙午 當
永作元年乙未 二三四五六七八九十
徳隆元年己巳 二三四五六七八九十
陽和元年己亥 二三四五六七八九
福泰元年癸未 二三四五六七八九
慶徳元年己丑 二三四五六七八九
盛徳元年癸巳 二三四五六七八九
永壽元年戊辰 三四五六七八九
萬曆元年壬寅
景治元年癸卯 二三四

右

右の曆の末の紀年として永化七年己丑金一歳年万三言九言
しして二十歳也所しあり

正徳九年丙寅火二十歳元とありて正徳九年丙寅

共福元年壬寅金廿九歳

嘉永元年癸卯金廿九歳 曰廿年丁丑水廿九歳

光興元年丙寅土廿八歳 曰廿二年己亥才二十七歳

弘安元年庚子土二十歳 曰十九年戊午火十八歳

永化元年己未火七歳 曰七年乙丑金一歳

としあり 右中の一と略して廿七

見當り記
の種教日誌

如く嘉永三年己卯の紀年七條九とあるの月録七年
表しして是れ嘉永三年の一月一歳とありしを右の月録と
實文

赤鳥帽子 一巻

御書古事記の巻末に
野宮御列記あり

元禄

能登判り 二巻

能登言古事記の巻末に

鑑上判判記 一巻

武藏の月見 二巻

享保

吉原丸鑑 二巻

武藏の月見の序より嘉永五年二月
市橋藩の川丸中校
吉原丸鑑の序より享保五年中校

也言

浪花其末葉

一卷

燥曲浪花蘆

一卷

寶曆

作判 千石節

三卷

歌歌 柳櫻浮林

一卷

東西浮林

一卷

竹本不越娘

一卷

花相婿

一卷

浮判龍美野子

三卷

義美之傳りの宿の趣三美其也言也言後
竹本の不越娘は宝曆四年以

宝曆四年の宿の假名本浮判記あり

三美の宿の假名本は宝曆四年の宿の假名本に
依りて作られたり此等の以ては名も同し

他は同し

浮判場宿の宿 宝曆八年板

竹本の浮判記 宝曆九年板

前と同し 十年板

川魚海魚が甲敷の宿 十三年板

評判花相婿

二巻

教訓新見景

二巻

多喜梅雪傳

二巻

傳勢浮林

二巻

明和

評判登前合

一巻

評判三燈志

三巻

三都浮林

一巻

娘心あつきの花輪

一巻

名代六花娘

一巻

義美の宿の宿 宝曆十三年板

十年板花相婿と同年は宝曆十三年か

宝曆年向の宿の一巻の宿人甲敷

曆日に見えて宿あり

明和二年板浪花東都軒

三都の浮判宿が及乃三味線引り

古歌りて月日す明和三年板

三都の浮判宿は及乃七年乙七宿あり

明和四年甲一板

江戸娘浮判記明和板

義方又取引

要示

河内茶臼巻

高貴也座位

京都水の高貴寄

河内江より慢

藥師兒の子可珍話

茶書題

河内千種の巻

天明 聖御物考取河内記

繪草紙 菊壽草

神史 固月八日

評判 鶯若梅

浄瑠璃 徳外高の巻

五十三次 江戸土産

江戸土産

いろは 浮城

浄瑠璃六日の巻

河内茶臼の巻 安永四年取

京都の巻 安永六年取

京都巻 貞吉書以て見立り

安永七年取

安永六年取

安永七年取

安永九年取

古本 固場水の巻 安永九年取

天明元年 出板の巻 安永七年取

天明二年 出板の巻 安永八年取

天明三年 出板の巻 安永九年取

天明四年 出板の巻 安永十年取

天明五年 出板の巻 安永十一年取

天明六年 出板の巻 安永十二年取

天明七年 出板の巻 安永十三年取

素人尋常臨河記

俳優風

寛政

寶貨集

角力合

言和

戲作存別名抄

任念世帯存別記

五右衛門存別記

文化

評判筆果報

三冊

大坂の素人尋常の文物追尋 天明
天明初年歌師存別記

一巻

一巻

古銭の月旦 寛政二年
相模の存別記 五年

三巻

三巻

三巻

一巻

安永の夜更あらず 各物
家知二年の存別記
書判の日は卯生 胎生
在り 留年
徳田の存別記

狂歌存別記

文政

大坂存別記

天保

三巻 天保三年の藝

諸宗存別記

業世名存別記

天保七年大相博存別記

和歌作書始

三巻

一巻

三巻

三馬の
天保三年の藝
大坂の夜更あらず
馬琴の存別記

三巻

二巻

三巻

三巻

佛教各宗の法名見立
天保五年
家名存別記
天保五年
和歌作書始
天保三年



新田入格の雛
天神

福寿の山の名
考

新田入格の雛の世にヤ
根 新 拍 原
体 御 蓬 文
本 鳥 益 神
形 ありては 雛の世に
今 山 城 の 雛 福 寿 の 山 名 ありては 雛の世に
を 雛 福 寿 の 山 名 ありては 雛の世に



三 合 凡 雛
の 雛 福 寿
有 雛 福 寿
今 雛 福 寿
雛 福 寿

思ふと、^{モリ}山形の形敏を盛なるは、山形の敏成業
敏成山と形の山より名流ありすとと思ふ所、
て後山を流す

三河豊橋の
事

三河豊橋を、^{モリ}山形の形敏を盛なるは、山形の敏成業
敏成山と形の山より名流ありすとと思ふ所、
て後山を流す
三河豊橋を、^{モリ}山形の形敏を盛なるは、山形の敏成業
敏成山と形の山より名流ありすとと思ふ所、
て後山を流す
三河豊橋を、^{モリ}山形の形敏を盛なるは、山形の敏成業
敏成山と形の山より名流ありすとと思ふ所、
て後山を流す
三河豊橋を、^{モリ}山形の形敏を盛なるは、山形の敏成業
敏成山と形の山より名流ありすとと思ふ所、
て後山を流す

春初
玉

某姓、^{モリ}山形の形敏を盛なるは、山形の敏成業
敏成山と形の山より名流ありすとと思ふ所、
て後山を流す
某姓、^{モリ}山形の形敏を盛なるは、山形の敏成業
敏成山と形の山より名流ありすとと思ふ所、
て後山を流す
某姓、^{モリ}山形の形敏を盛なるは、山形の敏成業
敏成山と形の山より名流ありすとと思ふ所、
て後山を流す

知

知、^{モリ}山形の形敏を盛なるは、山形の敏成業
敏成山と形の山より名流ありすとと思ふ所、
て後山を流す
知、^{モリ}山形の形敏を盛なるは、山形の敏成業
敏成山と形の山より名流ありすとと思ふ所、
て後山を流す
知、^{モリ}山形の形敏を盛なるは、山形の敏成業
敏成山と形の山より名流ありすとと思ふ所、
て後山を流す

物
の
し
か
し
よ

し
え
た
か
し
よ

た
し
か
し
よ

し
た
し
よ

し
た
し
よ

しつとて... 影... 其... 好... たり

梅... 枝... 葉...

東... 梅... 枝... 葉... 好... たり

梅... 枝... 葉...

梅... 枝... 葉... 好... たり

梅... 枝... 葉...

元年三月
梅... 枝... 葉...
木彫
枝城
顔



東の書

元和元年三月

有馬水天宮祭典

吉村周山

元和元年三月... 祭典... 吉村周山... 元和元年三月... 祭典... 吉村周山...

天保改形の
万年通寶

東大文庫の
書

元和元年三月... 祭典... 吉村周山... 元和元年三月... 祭典... 吉村周山...

Handwritten calligraphy in various styles and colors (black, red, brown) across a multi-colored background. The text is arranged in several lines, some horizontal and some vertical, following the diagonal orientation of the paper. The characters are highly stylized and fluid.



Small printed text at the bottom left corner, including the characters "録" (Record) and "卷" (Volume).